

「なら自治会ニュースコンクール2020」講評

(2021/03/13 審査委員長)

本コンクールは10周年を迎えた。

振り返れば、そのきっかけとなったのは、2011年3月に発生した東日本大震災である。未曾有の被害をもたらしたこの災害で、家族、親族、友人、ご近所さんの安否確認をはじめとする地域内での情報の伝達、共有手段として最も威力を発揮したのは、避難所に張り出されたり配布された紙の媒体であり、その重要性を再認識させられたからである。

コンクールは、同年度から生駒郡、北葛城郡の2郡を対象にスタートした。全国的にも例のない試みであり、試行錯誤を重ねながら対象地域を広げ、2014年度から全県コンクールとなった。

今、私たちは新型コロナウイルスの感染の中にいる。自治会ニュースは、その存在意義をより高めていると思われるが、ウイルスのまん延は自治会活動を制約し、ニュース紙の発行にも大きな影を落とした。

紙面に多かったワードは「少人数」「ソーシャルディスタンス」「活動自粛」「開催取りやめ」「(活動拠点の)使用禁止」などであり、定期総会や会議を書面審議・書面議決にした自治会が目立った。

それでも22団体から応募があった。取材、打ち合わせもままならない中で知恵を絞り、編集、発行を続け応募してきた自治会の担当者たちに敬意を表したい。

今回は、配布方法で『全戸配布』のところが増えた。応募22団体のうち19団体が『全戸配布』だった。『回覧』から『全戸配布』に変えたところもある。マンパワーや費用のハードルを乗り越えたと思われ、うれしいことであった。

本コンクールが10周年の節目に当たることから、今回これを記念して『10周年特別賞』を設け、2団体を顕彰した。

なお、『審査委員奨励賞』は評価基準に基づく総合評価にとらわれることなく、各審査委員が独自の視点から奨励の意味で選んだものである。

最優秀賞

◆「泉台ニュース」(河合町／泉台自治会)

総合的に水準が高く、モノクロのニュース紙の中では群を抜いている。自治会の発足時(1969年)から半世紀以上、毎月発行し続けているが、マンネリに陥ることなく、常に改良を意識していることがうかがえる。『泉台温故知新』などの新企画はどれも良く、紙面に深みと楽しさを与えている。コロナ禍により班別会議ができなかったため、自治会が文書で求めた要望・意見をまとめて掲載している。住民のリアルな声で、辛口のコメントもあり、これを見やすい形で公開したのは素晴らしい。紙面から、自治会の“成熟度”まで伝わってくる。

毎日新聞社賞

◆「三輪区コミュニティ新聞 馬酔木」(桜井市／三輪区自治会)

洗練された紙面。総合的に完成度が高い。記事、写真のバランスが良く、細かなところまで作り込まれている。古代からの歴史に抱かれた自分たちの町をさらに良くしたいという思いが静かに伝わってくる。「思い出・歴史散歩」は、ちょっとした街角の昔を振り返る連載モノ。当時の写真を付けており、住民の郷愁を誘っていることだろう。「駐在所のひとり言」も、お巡りさんが目線を低くして防犯を呼びかけているところが良い。紙面のあちこちに高齢者、子供たちへの眼差しも感じられ、好感が持てる。

優秀賞

◆「六条校区ほほえみだより」(奈良市／六条校区自治連合会)

カラフルな紙面。目立つのは人の顔だ。古民家を造る人、伝統工芸を受け継ぐ人……。 「ほほえみだより」は、自治連合会と校区内にある6地縁団体が構成された編集委員会(7人)が企画、取材、編集を行い、校区内で何かに熱心に取り組んでいる人を積極的に取り上げているという。顔が見えれば、親近感も湧く。何よりも紙面が生き生きとして見える。このニュース紙が地域の連帯感醸成に一役買っているのは間違いなさそうだ。多少、詰め込み感があり、これを改善すれば、より読みやすくなるだろう。

◆「西真美だより」(香芝市／西真美自治会)

いつもながら、表紙のデザインが良い。題字下の目次で、どの頁にどんな記事が載っているかがよく分かる。迷惑駐車パトロール、見守りボランティア、西真美花の会、防災活動、廃品回収、ごみ出し、サークル活動と、自治会活動に密着した身近で役立つ記事が12頁にわたって網羅され、住みよい地域づくりをサポートし続けていることが伝わってくる。紙面はすっきりして読みやすい。自治会ニュースづくりの“王道”を行っている感があるが、これに面白みのある記事が加われば、と思う。

◆「生駒市自治連合会だより」(生駒市／生駒市自治連合会)

自治連合会のニュース紙は、独自性を出すのがなかなか難しいが、異色の作りで驚かされる。まず、表紙の写真で読者の気持ちをワシ掴みにする。昨年9月号はオンライン編集会議の様子。これを見て、親近感を覚える人は多いだろう。単自治会の情報をまとめるだけでなく、主体的に住民の中へ入り込んでいこうとする姿勢を感じる。紙面の基調はモノクロと赤、あるいは青の二色だが、中面は漫画とイラストを駆使したレイアウトで、多色刷りをしのぐ効果を上げている。記事は災害に対する特集がメイン。

審査委員奨励賞

●地域愛賞「西長柄町通信」(天理市／西長柄町自治連合会)

昭和 50 年代の区画整理事業によって新しく生まれた町。極めてシンプルな作りで、モノクロ A4 判 2 頁。発行目的は、地域愛を醸成することだという。コロナ禍の中で、紙面には苦勞の跡がうかがえるが、「ふるさと歴史散歩」は目的にかなった好企画。投稿欄には人の顔が見える。写真付きで紹介されたプロゴルファーを目指す女性には、誰もが声援を送りたくなるだろう。

●ほのぼの賞「お知らせ号」(広陵町／大場)

大場は広陵町北部の 30 軒、80 人ほどの集落。「お知らせ号」は 1 頁モノだが、毎月発行している。これを作っているのは区長さんだ。カラーの使い方がうまく、読みやすい。毎号、個人名を入れて個々の活動にお礼を述べており、顔の見える記事から、ほのぼの感が伝わってくる。配布は「住民とのコミュニケーションを図りたい」との思いから、一人で一軒一軒訪ね、手渡しているという。

●式年ニュース賞「令和式年造替ニュース」(桜井市／桜井市黒崎区)

地域で特別な行事がある時、それに特化したニュースを発信していく取り組みとして評価できる。万葉集がこの地から始まったことを讃える碑と、その巻頭を飾る雄略天皇の歌碑で知られる白山比咩神社(しらやまひめじんじゃ)。20 年に一度の造替事業の進捗を三カ月ごとに伝えてきた。地域の伝統とそれを守る住民の誇りが感じられる。資料的価値があり、保存して継承してほしい。

●伝統文化継承賞「つぎか地区だより」(奈良市／鼓阪地区自治連合会)

東大寺、春日大社などの寺社が多く存在し、古くからの生活習慣や伝統文化が根付いている地域。その土地柄が紙面からにじみ出ている。住民の繋がりも強く、旧奈良監獄の保存と重要文化財指定の原動力になった。紙面はカラー刷りで写真も多く、読みやすい。大きな話題を多面的に取り扱い、読み手に興味を持たせているのも良い。伝統文化を後世に伝えていこうとする意志を感じる。

●防災防犯賞「セーフティ朱雀だより」(奈良市／朱雀地区自主防災防犯協議会)

ネーミングが良い。団体名から想像されるように、防災・防犯に特化したニュース紙。防犯講演会、防災研修会、防災展、自主防災訓練など奇をてらわないメニューで、記事がすっと頭に入ってくる。行動計画のカレンダーは目につきやすく、「豆知識」など工夫も見られる。回覧だったが、全戸に浸透しないことから、家族で防災・防犯を考えてもらおうと全戸配布に変えたという。

コンクール 10 周年特別賞

◆高塚台二丁目自治会（河合町）

毎年欠かさず応募している自治会の一つ。受賞歴もある。

紙面の見た目には改善の余地があるが、豊富な記事が活発な自治会活動、地域活動をよく伝えている。イベントにせよ生活上のお知らせにせよ、地域の隅々まで目を配って、柔らかいタッチで書いており、そのクオリティを保ち続けている。

特筆すべきは、防災、安全への一貫した取り組みだ。防災訓練、講習会、研修旅行も丁寧にレポートし、住民意識の向上に大きく寄与していると思われる。

毎回、民生・児童委員、地域安全推進委員の連絡先を顔写真付きで載せているのが、ユニークだ。

◆真美ヶ丘自治会（香芝市）

初応募から5年連続（全県コンクールとなってからは3年連続）最優秀賞となり、2017年度に「殿堂入り」した。以降応募がなく現状は不明だが、当コンクールをリードした功績は大きい。

紙面は、構成、レイアウト、見出し、すべてにメッセージ性があり、住民が「知りたいこと」を報じ、「知って参加したくなる内容」にするという意識が貫かれ、楽しさもあった。

自治会ニュースの作り方に「これがベスト」というものはないが、一つの到達点を示していたと言えるだろう。

以上

審査委員

- ・ 津野恭誉 元毎日新聞社論説委員
- ・ 堀川剛護 毎日新聞社奈良支局長
- ・ 山内嘉信 日本映画撮影監督協会副理事長
- ・ 毛利嘉晃 奈良県知事公室広報広聴課長
- ・ 鈴木 遥 ノンフィクション作家